MEDIA IMFOMATION

2023 年 10 月吉日

iCraft レースレポート

ＥＮＥＯＳ スーパー耐久シリーズ 2023 Supported by BRIDGESTONE
第 6 戦「スーパー耐久レース in 岡山」

2023 年 10 月 21 日～22 日　岡山国際サーキット（岡山県）

予選（土）：晴れ・くもり・一時雨／ドライ・ウエット　入場者数：2,800 人

決勝（日）：晴れ／ドライ　入場者数：3,800 人

OHLINS Roadster NATS（マツダロードスターND5RC）

金井亮忠／山野哲也／野島俊哉

正念場の岡山大会で 2 位表彰台獲得！ライバルとのポイント差を広げ最終戦へ

いよいよ終盤戦を迎えた 2023 年のスーパー耐久シリーズ。#72 OHLINS Roadster NATS が参戦する ST-5 クラスは、9 月に行われた第 5 戦もてぎが“不参加クラス”となるため、チームとしては 7 月末の第 4 戦オートポリス以来、約 3 ヶ月ぶりのレースとなる。今季の第 3 戦と第 4 戦で 2 連勝をかざり、僅差ながらライバルを逆転してランキング首位に躍り出た 72 号車。今回は、全体をふたつのグループに分けて開催される 3 時間レースで、さらにポイント差を広げて、最終戦の富士スピードウェイ 4 時間耐久に臨むのが目標だ。

【公式予選】
72 号車は ST-5 クラス最大のハンデウェイトを搭載しての戦いとなり、ノーウエイトのライバル勢に比べ厳しい戦いが予想される。午前のフリー走行はドライコンディションだったが、予選前に通り雨に見舞われ、路面はウエットコンディションとなった。それでも、A ドライバー予選開始前には青空が広がり、急速に路面コンディションが回復していく状況にあった。

今回も A ドライバーを務める金井は、ウエットタイヤを装着してコースインしたが、急速に路面が回復し、セッションの途中でピットイン、ドライタイヤに交換するも計測 2 LAP でタイムアップ。1 分 56 秒 387 のタイムは、クラス 2 番手につけた。

続く B ドライバー予選では山野がマシンに乗り込んだ。４５ｋ増のハンデに苦しみながらも、山野はベストを尽くす走りを披露して 1 分 51 秒 420 で 5 番手に入った。 2 人のタイムを合算した総合結果で、72 号車は 2 番グリッドを獲得。決勝レースに向けて好ポジションを獲得した。

金井亮忠
予選前の雨は全く予想していなかったです。雨が降るのであれば、そのまま降り続いてほしかったのですが、途中から晴れてきたのでとても難しい状況になりました。走り出してみたら、すでにコーナーの外側は乾き始めていたので、最初にウエットタイヤでタイムを出して途中でドライタイヤに交換しました。そこからアタックは 2 周しかできませんでしたが、56 秒台まで出すことができました。

山野哲也
A ドライバー予選ではウエットからドライに切り替えてくなかで、金井選手は 2 番手タイムを記録してくれました。B ドライバー予選での 5 番手というのは想定通りの順位。自分のなかではセッティングは煮詰めきれていないところがありますが、今回は 45kg というウェイトハンデを積載した中で、51 秒台を出せたというのは速く走れているのと同じだと思います。いずれにしても、今シーズンのなかで一番ウェイトを積んでいる状況で総合結果でクラス 2 番手を獲れたのは大きいです。

【決勝レース】
今回は全体を 2 つのグループに分けてレースが行われる第 6 戦岡山大会。ST-3、ST-4、ST-5 クラスで争われるグループ 2 は、午前 8 時 30 分からレースが始まった。ST-5 クラス 2 番手から臨んだ 72 号車は、金井がスタートドライバーを担当。3 時間レースの場合、A ドライバーは最低 1 時間以上を走行しなければいけないルールがあり、それを早いうちに消化する作戦にでた。

序盤から激しいトップ争いを展開したが、ウェイトハンデが他車より重いこともあり、少しずつ順位を落としたものの、ライバルに引き離されることなく周回を重ねていった。 開始 1 時間を迎えるあたりで、ライバルたちが続々と 1 回目のピットストップを行ったが、金井が安定したペースで走れていたのでチームはピットストップのタイミングを遅らせることを決断。1 分 53 秒後半から 1 分 54 秒前半のタイムを刻んだ金井は、スタートから 1 時間 30 分も超えるロングスティントを担当することとなった。それでもミスなく走り切り、48 周目にピットイン。野島にドライバー交代するとともに、左側 2 本のタイヤ交換と給油を済ませてピットアウトした。

レース中盤を担当した野島は、短いスティントになることもあり 1 分 52 秒台のアベレージで周回。64 周目には 2 番手に浮上した。 ゴールまで残り 40 分となった 72 周目に 2 度目のピットストップを敢行。山野がマシンに乗り込むとともに、右側のタイヤ 2 本交換とゴールまで必要な燃料を給油。NATS の学生たちは迅速かつ確実な作業を披露し、72 号車をコースへ送り出した。

残り 30 分を切って、トップから 22 秒差の 2 番手につけた 72 号車。このまま最後まで走り切りたいところだったが、背後から 3 番手の 50 号車のロードスターと接近戦のバトルとなった。72 号車は 45kg のウェイトを積んでいることもあり、苦しい戦いとなったが、山野は懸命の走りをみせて 50 号車の先行を許さなかった。 両車のバトルは最終ラップまで続いたが、山野の粘り強い走りが功を奏し、2 番手を守り切ってチェッカー。4 戦連続での表彰台フィニッシュを飾った。 これで、ポイントランキングでもライバルとの差を広げ、12.5 ポイントをリードした状態で最終戦の富士大会を迎える。

金井亮忠
ウェイトハンデが厳しく最初はポジションを下げてしまいましたが、1 時間を経過した辺りから燃料が軽くなったこともあって再びペースを上げることができました。山野選手が状況を見てくれていて「クリアで走れるのであれば、もう少し引っ張ろう」ということで、予定よりも長めに走らせてもらいました。他の車両に詰まり始めそうなところでピットインできたのも良かったと思います。ポイントリーダーですが最終戦も全く気が抜けません。ベストを尽くして頑張りたいと思います。

山野哲也
チェッカーフラッグの寸前で大バトルになるというのは、耐久レースではなかなかないことで、スプリントレースをやっていた頃を思い出すような展開になりました。決勝に関しては、僕たちのピットワークはパーフェクトでした。そこで遅れを取り戻すというのを続けていったレースでした。88 号車には追いつけなかったが、僕たちができた最高のレースはできたと思います。これでライバルとのポイント差は広がりましたが、今年から最終戦のポイントは 1.5 倍になることを考えると楽な展開になるとは思えません。17 号車は富士を得意としているので、おそらく彼らはポール・トゥ・フィニッシュをするだろうと思います。その中で僕たちがどこに入れるか。本当に予断を許さないレースになるのではないかと考えています。

野島俊哉
今回は 1 分 52 秒台に入れて周回していくというのが自分のテーマでした。ある程度は達成できて良かったのかなと思います。あとは、学生さんたちのピットワークがすごく速かったです。いつも遅くまで練習していて、そこで身についている自信もあるでしょうし、その中でも決勝では最速に近いタイムを出してくれたと思います。それにすごく助けられたので、感謝したいです。

猪爪俊之監督

今回は 3 時間レースならではの柔軟に対応できる作戦で進めていきました。金井選手の決勝ペースが良かったので、ピットインを可能な限り引っ張ってレースの流れを見ながらタイミングを計算し、2 番手の野島選手をクリアーな場所に繋げられたので、作戦としては上手く行きましたね。最後の山野選手のパートでは終盤、50 号車とのバトルになりましたが、ハンデゼロキロの相手に対し、抑えきっての 2 位ゴールは大きいです。最終戦はポイントが 1.5 倍になるので、2 位の 17 号車に対してポイントでリードしてる感はほとんど無しですね。ライバル達の事は気にせず、自分達のチームの全力を出し切りたいです。